発行月：2023 年 5 月
発　行：真宗大谷派　辻徳法寺

第 37 号

徳　　朋

自我意識より深いところ

本多　雅人

ほんだ　まさと
1960－現在
東京都出身。
東本願寺同朋会館教導、
元親鸞仏教センター嘱託研究員、元高校教員

西洋では本当に人間が人間になるということはどういうことかというと、少し言葉が難しいのですけれど、「自己を確立すること」であると。理性とか知性が絶対的に大切で、何でも判断できて行動できる自我を確立することで、大人になることであり、人間になることなのだと。これが西洋の捉え方です。私も社会科の先生でしたので、学校の授業でも「アイデンティティ（自己同一性）の確立」という言葉で、自我による自己の確立が大切と教えていましたが、それは間違いでした。仏教は自我ほど危ないものはないと言っているのです。

自我意識を自分だと思い込んでいる現代人は、なかなか仏教の教えに耳を傾けません。仏教の教えが聞けるという状態は本当に追い込まれた時だけです。自我分別では間に合わないという時だけです。自我は「自分の思い」と言ってもいいと思いますが、自分の思いが間に合っているうちは絶対に聞こえてこない教えなのです。ですから仏教の教えは世間の価値観に合わない。通用しない。世の中は仏教の教えと違うところで動いていると思っている人が大多数なのです。そういう人は仏教の教えを聞けないのです。しかし、必ず自分の思いが間に合わないことが起こります。今日頷けなくても、そのうち身に響いてくるということがおこるかもしれません。でも、聞いて頷いたとしても、一歩外へ出るとみんな忘れてしまいますね。それ

ほど私たちの思い、執着というのは強いです。仏教ではこの自我のことを「自力のこころ」とか、「日ごろのこころ」という言い方をします。『歎異抄』では「日ごろのこころにては、往生かなうべからず」とあります。「日ごろのこころ」というのは自我分別、自分の思いです。わかりやすく言うと、自分の思い通りにしたいというこころです。そういうこころでは往生できませんと言っているのです。（中略）仏教が見抜いた人間の本当の願い・本心というのは、自分の思いや自我意識よりももっと深いところにあるということです。その深いところに本当の人間の本心が生き生きと生きているということを見抜いたのが仏教です。（中略）

私は教えを聞いてきて、ここに感動したのです。最初は何を言っているのか、さっぱりわからなかったのです。ところが、何も間に合わない苦悩のところに教えが響いてくるのです。自我はある意味大事です。分別ができない人間というのは怖いじゃないですか。しかし、分別することで人間は苦しむのです。ですから、自我を絶対化すると深い闇の中に入り込んで、自分を見失ってしまう、ということを仏教は呼びかけてきたのです。

（『誕生と往生』）

私たちは自分の頭の中で考えている事が自分の願いだと思い込んでいますが、実はもっと深いところにはたらく「いのちの叫び」があります。その「いのちの叫び」に応えていくものが仏教です。（哲弘　拝）

この「徳朋」は仏教を拠り所としている方々の言葉に直に触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、気にせず読んでみて下さい。